

浄土

1989-10

第五十五卷

十月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別扱承認雑誌） 第三二五号
平成元年九月二十五日印刷 平成元年十一月一日発刊





十月の秀句

砂の如き雲流れ行く朝の秋

正岡 子規

眼鏡はづして病む十月の風の中

森 澄雄

朴の葉や秋天高くむしばめる

飯田 蛇笏

十月号



末代悪世の衆生の往生の志を致さむに於ては、又他のつとめあるべからず。只善導の釈に付て一向専修の念仏に入るべきなり。

——『念仏大意』

目次

◇◇特別連載◇◇

両総の在阿〔一〕……………山本恭雄……(2)

三百年前ノ

「おくのほそ道」の旅に出た芭蕉……………細田隆善……(10)

童話の世界〔Ⅵ〕

音(その六)——「ゴ—ゴ—ゴ—ってなんの音」…ぬのむらてつや……(23)

<読者の便り>

迷妄のとらわれから脱しよう——……………吉田勇之助……(19)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <31>

海と山の狭間で

……………木下隆一……(30)

——我が思い出に住む犬たち(17)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(10)

……………松浦行真……(36)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

◆◆◆ 特別連載 ◆◆◆

阿 総 の 在 阿

[一]



法然上人より八百有余年、浄土の宗派は脈々と受けつがれている。

その中において有名、無名の僧の数は限らない。

その歴史の中で中世に千葉県に共に在阿と

称した二人の仏者がいた。

同時代に生き、ひたすら無欲に生きた二人の在阿。

一人は上総国周東の在阿であり、一人は下総国鎭木の在阿であった。

やまもと きょうゆう
山本 恭雄
(木更津市選択寺住職)

共に浄土三祖良忠上人にめぐり会い、共に生涯を一念仏者として心安らかに過した。

ときに同一名、同時代、同地方のことなどもあり（上総にも蕪木^{かぶち}というところあり）、同一人物と思われていたこともあったが、一人は名もなき者の生れであり、一人は名も高き武家の生れであった。

しかも、二人の在阿の求道心こそ、法然の教えを現代に伝えるために果たした役割は、決して少くないのである。

周東の在阿



在阿法師像（三経寺）——

桓武天皇の勅願によって創建された、三途
阿頭 極楽東門 大平埜山 閻浮大衆 本実
成院 阿弥陀坊 長福寿寺という僧院の前に
一人の男が立っていた。

中から聞えてくる誦經の声は心の底に響い
た。

寺は天台の檀林として総門三百八ヶ寺を支
配し、門前には三途川が流れ、そこにかかる
三途橋を渡ると現世の浄土を思わせる諸堂と
庭園が広がり、数百人の学僧が学び励む上下
両総の触頭であった。

蓮池を前にして、一輪の泥水華の輝きを、
わが心の中に求めんとし、やがて出家するこ
とを決めたのである。

そして名を在阿と称した。

入山するやその修業と勉学は他の追隨を許

さなかった。次第に学僧としての名は知られ
るようになっていったが、しかし如何とも躰
は病弱であった。

夜を徹しての一切經の読破は体に応えた。

次第に病に冒されていった。

今日の肺結核であろうか。

年を重ねるうち、ときに吐血することもし

ばしばであった。

そんなとき、求道の心は燃えながらも、一
方自らの短命を感じていた。

しかし、いつになっても心の中に満たされ
るものは少なく、今尚、救われぬむなしさが
満ち溢れ、自然悶々たる日々が続いたことも
あった。これでよいのであろうかと。

学ぶにつけ、次第に法然の説く浄土の教え
に心を引かれていった。

生きておられたならば、今すぐにでも、法然上人のもとに馳せ参じたい、そう思った。

しかし今となつては、その教えを受けつがれた筑後の弁長上人すらこの世にはない。

しかし、広いこの世のこと、どこかに弁長のように法然の膝元にあった方、又弁長の教えを頂いた方がいる筈だと思った。

是非共その方々にお会いをして、本当の法然の説かれた念仏の要門を伺い、浄土についての疑問を晴らし、自らの安心を得たいとそう願った。

そう願ったのも無理はない。

その頃、浄土の教えを伝える人々にも様々の諸義があった。いずれを聞法しても納得はするけれども、果して真に法然の示された教えは何であつたのか、戸惑いもあつた。

真実は一つなのに。

これからの何百年の後までも真の法然の念仏の教えが伝わるには、今、自分の疑いを晴らし、そして自らも浄土の教えに導かれて往生したい、そう願つたのである。

そう思うと矢も楯もたまらなかつた。

思いはつゝ。病いも一向に快方に向わない、もう自分には時間がない、そう思った。

建長七年九月、遠江国一宮領の蓮華寺に赴いた。そこで幾多の書物を読んだ。しかし、疑問の解決に書物は役立たなかつた。

禅勝房にも書状にて尋ねたが、その返事にも満足はできなかった。

幸い相模国石川の里に渋谷七郎入道道遍のいることを知り、病身を押して石川の里に足を運んだ。

道遍はすでに頭に白いものを重ねていた。

「法然上人に会ってからもう幾歳月になることでしょう。それは本当に尊く有難いことでした。今日ではあまりにも上人の念仏の奥義も深く、証空、隆寛その他の上人方にしても、一つの教えとして伝えることには、まだ程遠いものがあるようです。しかし聖光上人は法然上人の教えを心して伝えられています。聞くところによると、聖光上人の教えを受けた良忠という方が下総におられるということです。私も一度お会いしたいが老齢の身、それも叶いません。早よう良忠をお尋ねなさるよう」

そのやさしい言葉の中に道遍の敵しさが光っていた。

尋ねて来て良かった、そう思った。

在阿はひとまず上総へ戻ったが、旅の疲れの為か暫らくは床に臥した。再び起き上ると、『念仏名義集』や『観経疏』を繰返し読んだ。

その頃鎮雨の教えを受けた然阿良忠は信州の教化を終え利根川沿いに関東に入り、野、武、常、総の各地を遍歴し、今は下総にあって千葉一族の支援をうけて人々に念仏の教えを説いていた。

匝瑳郡松崎郷福岡に於て良忠が『観経疏』を講義していることを人づてに聞いた在阿は小踊りして喜んだ。

良忠は上総常楽寺でも説法していた。そのことを知らなかったことが悔まれた。

正嘉元年正月を迎えた。又一つ齢を重ねた。今はもう暖かな春すら待ってられない。そ

う思うと足はもう下総に向っていた。

十七日、福岡談義所の前に立った。

雪こそ降らないが寒風が肌をさした。

良忠に会える。

そして今こそ我が疑いが晴れる、そう思う

と寒風すら東風に思えた。



「私は、上周東の在阿というものでござい
ます。天台の僧をして道を求めて参りましたが、
随縁とでも申しましょうか、授手印や観経疏
にめぐりあい、ひたすら読み返して参りまし
た。

お念仏の道を少しづつ体得して参りました

ありがたや

松のみどりの

千代の春

如来のよりき

いつもたやせぬ

(在阿法師御詠歌)

——在阿法師墓

(三経寺)——

が、いまだわからぬことばかりです。

禅勝房、道遍上人の教えを頂きましたが、尚不解なところも多く、法然の教えも、学ば学ぶ程諸義があつて、真の法然上人の浄土の教えがつかみとりませぬ。

どうかお教え下さいますように」

合掌して向う手は心なしかふるえていた。

その姿には後光すらうかがえる。

手には手印の疑問を捧げ、口に口伝の快答を請う。

良忠の眼は輝いた。良忠五十九才、決して若くはなかった

「よくぞお尋ね下された。

御身と私も同じこと、今では齢も重ねて、健康も今迄通りではありません。まして記憶も少しづつ薄れることもあるのです。しかし、

私の知る限りお答えしましょう」

尋ねる在阿、答える良忠正に決答だった。決答とは決定明答といつて曖昧な答えをしない、明解に答えることである。

尋ねたのは『末代念仏授手印』であつた。

正に良忠の答は明解であつた。

「一点も疑うべからず、

念仏申せば救われる」

在阿は涙を流した。

良忠も目がうるんだ。

その後良忠は、今こそ、在阿の請いに答えて、真の疑問を明らかにすることが必要であるとして、『決答授手印疑問鈔』を撰したのである。

(つづく)

◇ ◇ ◇ 好評新刊 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

三百年前！

「おくのほそ道」の旅に出た芭蕉

細田隆善
ほそ だ りゅう ぜん

松尾芭蕉（一六九四没）は元禄二年（一六八九）晩春、念願のみちのくの「おくのほそ道」の旅に出て有名な紀行文を残しました。本年の平成元年（一九八九）から丁度三百年前のことでした。

このときの旅の紀行文「おくのほそ道」は数年に亘って推稿した文芸作品であり、わが

国最高の紀行文と称賛され、この紀行文の中に芭蕉の句は五十一句あまりありますが、芭蕉の秀句が数多く集録されています。しかもこの紀行文と芭蕉の句とが混然一体となっているのもすばらしい点であります。その芭蕉の秀句を選んでみます。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

行春や鳥啼魚の目は泪
 あらたふと青葉若葉の日の光
 田一枚植ゑて立去る柳かな
 夏草や兵共が夢の跡

五月雨の降りのこしてや光堂
 閉さや岩にしみ入る蟬の声
 五月雨を集めて早し最上川
 象潟や雨に西施かねぶの花



——「おくのほそ道」史跡巡り案内

(先頭・筆者) ——

荒海や佐渡によこたふ天河あまのがは

一家ひととせに遊女も寝たり萩と月

あか／＼と日はつれなくも秋の風

塚も動けわが泣く声は秋の風

むぎんかな甲かぶとの下のきり／＼す

蛤はまぐりのふたみにわかれ行く我ぞ

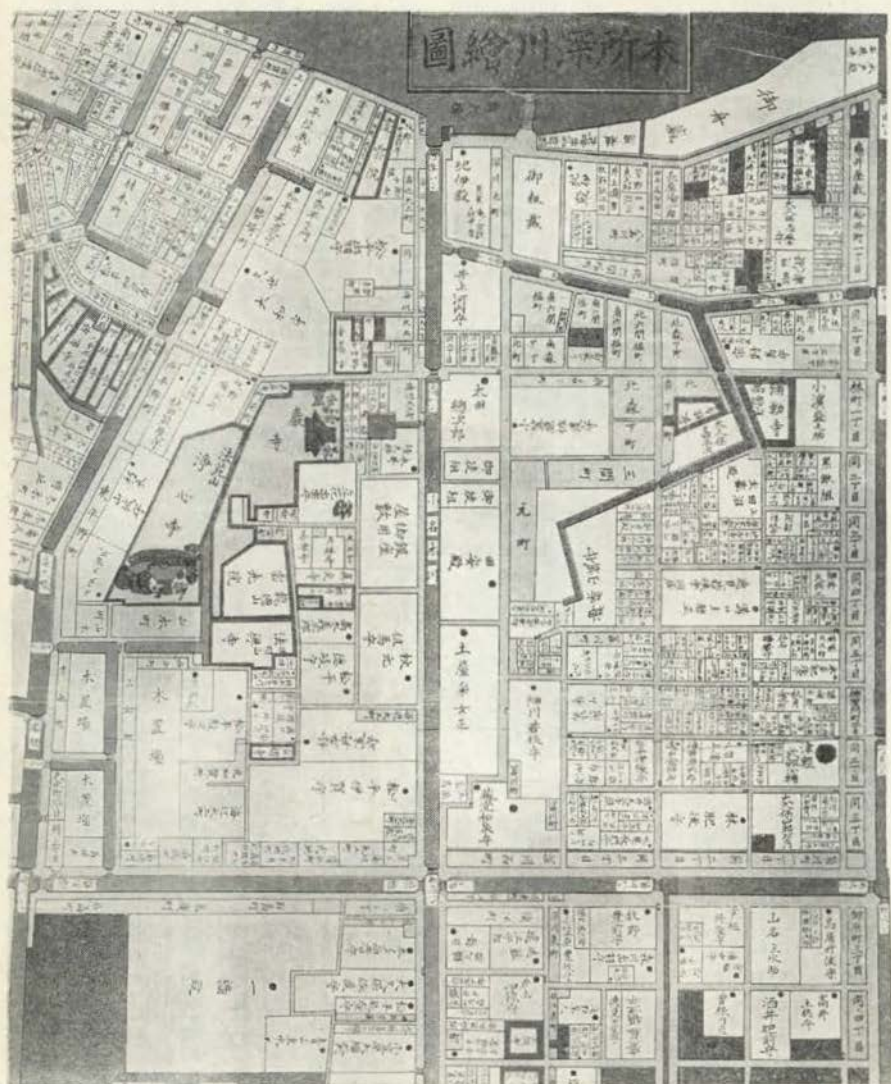
名文である「おくのほそ道」の紀行文は数年をかけて芭蕉が添削し、単なる旅行を記録した紀行文でなく、全体を一大文芸作品として完成されたところに現在においても称賛される理由があります。とくにその冒頭の一節は暗唱されて愛好されています。紀行文は長文であるので観賞の点から、また巡った名所の点から五十節に区分されています。

その第一節と第二節が住み馴れた深川芭蕉庵を出立し、杉風すぎふう（一七三三没）の別邸採茶庵さいちあん

から乗船して、門弟と別れる場面となっています。

（一）

月日つきひは百代の過客くわかくにして、行かふ年も又旅人なり也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物（者）は、日々旅にして旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり。予よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋はせに蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮く、春立はるたてる霞の空に白川の関せきえんと、そぞろ神かみの物につきて心をくるはせ、道祖神どうそじんのまねきにあひて、取とももの手につかず。もゝ引



——本所深川絵圖（元久二年〈1862〉）

芭蕉庵跡と西平野町海辺橋、

仙台堀川などがよくわかる——



——仙台東川と向うの海辺橋
(芭蕉は海辺橋から舟に乗り、千住へ) ——

の破をつぐり、笠の緒付かえて、三里に
灸するより、松嶋の月先心にかゝりて、
住る方は人に譲り、杉風の別墅に移るに、
草の戸も住替る代ぞひなの家
面八句を庵の柱に懸置。

「百代」は「はくたい」とも読み、長い年
月のこと。杉風の別墅とは別邸のことの後述
する。この一節は序文ともいうべき名文、た
だし深川芭蕉庵を孫娘のいる人に譲って旅に
出立することを句にしたのは現実である。妻
子を持たぬ自分と比較するところにこの一句
の哀歎がある。この孫娘について「草の戸
も」の詞書に触れている。

「草の戸も」詞書

世中百韻

はるけきたびの空おもきやるにも、いさ



—芭蕉記念館・芭蕉堂（東京都史跡）—

ゝかもこゝろにさはらん、ものむつかし
ければ、日比住ける庵を相しれる人にゆ
づりていでぬ。このひとなむ、つまをぐ
し、むすめ・まごなどもてるひとなりけ
れば、

草の戸も住かはる世や雛の家

ここに出ている雛の句は「おくのほそ道」の句と形がいささか異なる。深川芭蕉庵は狭いので、大勢の門弟と別れの会がしにくいので杉風の別邸の採茶庵に移り旬日を過したのである。採茶庵の位置は明確でないが、西平野町、現在の江東区深川老人福祉センター付近である。坪数は九百七十二㎡・間口二十七m、奥行三十六mであったことはたしかです。「茶」は「と」とも発音しますが、茅花のこ



——芭蕉記念館・芭蕉句碑

(草の戸も住替る代ぞ雛の家) ——

とです。茅花は春になると細長い穂を出し、子供たちはこれを摘んでむいて食べると甘味があつてなんともいえぬ野趣のあるものです。しかし初夏になるとすぐ白い穂を出し風になびかし、二十七センチでいどの高さであるが一面に白い穂をなびかすのでこれまた風情のあるものです。この点から杉風は採茶庵を号として、深川平野町一丁目の採茶庵の別邸の庵号としたものであります。芭蕉も採茶庵にはしばしば遊んだことがありました。第二節はつぎのとおりです。

(二)

弥生^{やよい}も末^{すえ}の七日^{なぬか}、明^{あけ}ぼの空^{うら}臘^{ろう}々として、
月^{つき}は在^あ明^{あけ}にて光^{ひかり}おさまれる物^{もの}から、不^ふ二

の峯幽にみえて、上野、谷中の花の梢、
又いつかはと心ほそし。むつまじきかぎ
りは宵よりつどひて、舟に乘て送る。千
じゆと云所にて船をあがれば、前途三千
里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまた
に離別の泪をそゝく。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なをすゝまず。
人々は途中に立ならびて、後かげのみゆ
る迄はと見送なるべし。

芭蕉は前途三千里、おくのほそ道、半年の
長旅をするのに大勢の門弟と離別を惜しみた
かったのです。とくに妻子のない芭蕉は門弟
との別れにひとしほ悲しみを深めました。当
時はわずかな旅でも水盃をして別れを惜しみ

しました。そのため採茶庵で旬日の間、門弟と
の別離の会を持ちました。門弟たちは饞別や
持薬を持ちより、みちのくの知人の紹介状な
どを呈したことでしょう。旅をつづけても門
弟の家に泊るときは馳走接待を受けることも
ありましたことでしょうが、知人のいない旅
路では旅籠や民家に泊り小金が必要でした。
また旅の途中、団子やまんじゅう一つ買って
も小金がかかるのであって、みちのくの旅は
芭蕉にとって金のかかる旅でありました。

この採茶庵の近くに仙台堀川が流れ近くの
隅田川に注いでいました。この採茶庵のそば
に海辺橋があり、ここで大勢の門弟と別れを
惜しみ舟に乗り、仏台堀を下り、隅田川をの
ぼって千住に上陸しました。「おくのほそ道」
では乗船して深川を出立した日を三月二十七

日と記載されていますが、同行曾良（二七二〇没）の日記では三月二十日となっています。

芭蕉は「おくのほそ道」を数年かかって脚色していますので三月二十日が正しいと思います。しかし元禄二年は（二六八九）閏月の年でありますので、平成元年（一九八九）の太陽暦に換算しますと四月二十五日に当ります。そのため第二節の句に「行春」の晩春の季節が使用されています。この句は門弟との別離の悲しみを吟じた句です。舟で千住に向うとき、隅田川の兩岸の桜はすでに葉桜となっており、小鳥の囀りも賑やかであったが、その小鳥の鳴き声は門弟との別れの悲しみを表現し、隅田川をのぼるとき舟べりへ寄ってくる小魚は、芭蕉にとっては別れを惜しむ門弟の姿に見え、その哀傷を「魚の目に泪」と吟じたのであり

ます。しかもこの句は元禄二年（一六八九）の旅の作品でなく「おくのほそ道」の完成時期である元禄六年（一六九三）、この紀行文最後の「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」の句に対応して作られたといわれています。「行春」と「行秋」の対照、「蛤」と「魚の目」の魚貝類の対照が、全篇を通じて美しく飾られています。

採茶庵碑の辺に探す茅花の穂（細田豊明）

「おくのほそ道」第一集を記した仙台堀川は都市計画によって埋め立てられようとしています。

仙台堀都市計画に埋めなむか
史跡ふる川また一つ消ゆ

（細田豊明）

迷妄のとらわれから脱しようとして――



よし
田 勇之助
ゆうのすけ

生物は己れの生命を本能的に守ろうとするが、「死」に対する恐怖意識は持つてはいないのであらう。人間はそれを持つてゐるが、その意識の強弱は人によって異つてゐる。わたしは意識の度合いがいささか病的ではないかと反省してゐる。

時を同じうして充員召集令状を受けとつた出身大学こそちがうが極めて親しい同期の得難い友人の一人の言葉が思い出される。

「戦地へいっても、人は殺さないようにし、また自分も死なないようにする。良い硯でも見つかったら手に入れてくるよ……」と言つて応召入隊していったが、四ヵ月後にはもう戦死してしまつた。

先日ある新聞紙のテレビ番組案内のすみに、よく名のとおっている芸能人が、その尊父であり、一寺の住職でもある方の人柄や、召集を受け寺へ挨拶に来た檀家の人に対して語っている言葉が出ていた。その一部、「……そうか、とうとう来たか、君な、戦争というものとは集団殺人だ。君はその片棒担ぎに行くんだから、なるべく相手を殺さないように、自分も生きて帰ってこなきゃ駄目だ……」

受召者に「おめでとう」といっていた当時に、前述のような言葉を申うせる人はすばらしい。戦争に多くの疑問、怒りを持っていたもう一人の同期兵の親友も戦死してしまった。

「死とは何か。よく考えてみるよ……」と話しかけてくる心持がいつもしてならない。二人の親友の戦死は知ること不可能な宿世の業の結果なのであろうか。

読んだことのある經典の講話類とか、『歎異抄』を取り出し読んでみたが、何分自己流に読んでるのでよくわからない。仏教講演会等にはつとめて出席し、拝聴している。

死後は全く知ることが不可能であるだけに「死の恐怖」があるのだ。「死」を経験することは出来ない。「死」を見つめ、どのように取り組んでいったらよいのであろうか。

難病がもたらす肉体的苦痛は「死」の苦痛ではない。「死」に至る迄の苦痛であって、「死」そのものは、どういうものか知ることとは出来ない。「死」と「生」が入れかわった時点から自分を構成していた組織の腐敗が始まり、みなそれぞれ別のところへ散り、消滅し

てしまう。宇宙的大生命とでもいうような生命の流れに浮かび出ていた泡が消えて、生命の流れに戻っていくようなものと思っている。これだけでは、生きていくうえのしつかりとした心構えにはなっていない。自分の知的なばかりはなれ、全託の心構えの生き方をいたし、一日も早くしつかりとした自信のある生き方の工夫をいたさなければならぬ。

「死の恐怖」を乗り越えることは至難である。有限ではかない生命を受けている人間であるが、永遠にして真実の世界にどうかして往生したいとただ思い出しては、仏を念じつとめている。

法然上人の御法語の中に、「念仏はまたく風情もなし。ただ申すよりほかの事なし」とあるのが有難い。

釈尊のおことば、「人々はわがものであると執着した物のために憂う。(自己の)所有したものは常住ではないからである。この世のものはただ変滅すべきものである」(『スッタ・ニパータ』八〇五)をいただき忘れぬようつとめている。

生れたものは死ぬのであるというはつきりしている事実を見究め、それに対して、しつかりとした心構えを持って、執着、不安意識の克服につとめていかなば、迷妄のとらわれから脱することはできない。

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

(童)(話)(の)(世)(界)
〔Ⅵ〕

音(その六)——「ゴ—ゴ—ゴ—ってなんの音」



ぬのむらてつや

わたしは南天の実。

パア—とあたりがあかるくなつたかとおもうと 地面の上へ芽を出したのです。

いままで地の中のかうやみになれていたのですから それは目のくらむようなかかるさでした。

「あ— やつと出られた。ふわ—といい気持。こんな世界があつたのだ。」

まるで夢をみているみたいです。なんにもわからない赤ちゃんが 始めてのところをキヨロキヨロと見まわしているようです。

お日さまは どしりどしりと芽の上へのし

かかり カンカンとたたきながら照りつけます。からだがかげて もえだしそうです。

目をあけてお日さまをみた南天の芽は くらくらしめたおれそうになりました。

そのとき サアーッとそばを通りすぎるものがあります。ハッとしてよく見ると白い服を着た風が さけぶのです。

「そらそら足をふんばって しっかり立ちあがらないとたおれてしまうぞ」

いままで照っていたお日さまがかげつて 黒い雲がでたかとおもうと ポツリポツリつめたいものが頭にあたります。

とおもっているうちに ザアーッという音といっしょに小さい水のかたまりが つぎからつぎへ まるでてっぼうのタマのように打ちあたってくるのです。

そんな雨の日がなんにちもつづくと こんどはいくにもいくにも水がなくて のどがからからです。芽をのばす力もなくなつてぐったりしておれてしまいます。

あんなにして土の上へでたいとおもつていたのに やつと出たらつらいことばかり。

まだまだあります。

人間がそばへくると ひやりとするのです。一歩まちがえたら芽なんか ひとたまりもなくなべちゃんこです。

そして ザックザックバラバラブツン。

「これはいい草だから のこしておきましょう。こっちはよけいな草だから かりとつてしまおう。ザックザック」

「この花はきれいでかわいいから ひりょうをあげましょう。バラバラバラ。あの木はき

たなくて見た目がわるいから きってしまいましょ。ブツンブツン」

土の中でアリさんは 地面の上にはなんでもあるんだといっていました。そこではひとつのパンくずをみんなで取りあいをしているのです。力のつよいものが全部をとってしまいます。

そればかりではありません。

「おまえなんか ここへ出てくる木じゃないよ」

そういいながら大きな木は ほかの木をおしのけてどんどん大きくなります。小さい木は のびたくても のびられずに小さいまま。

「ああ いやだなあ。こんなことなら土の上へ顔をだすんじゃない。くらくてもいいから土の中で しずかな音をきいていればよ

かった」

そうです。あの音です。

スクスク コッコ ポトポト ズズズ
木の葉のおばさんのスクスクという声と
コココのオンドリの歌と ポトポトおちる涙
と ズルズルとみんなをうごかす地球のマグマです。

「あのころはよかったなあ。みんながひとつの家の中にいるみたいで たのしかった。もとの石の下へかえりたい」

南天の実は せっかくのぼした芽をガックリとたらしめました。とつぜん

ゴーゴーゴー

いままできいたことのない音です。

ゴーゴーゴー

耳をつんざくすさまじさです。これまでの

音とはけたちがいの 天や地をゆるがせるようなひびきです。

南天の実は芽をもたげて 音のする方を見ました。

ゴーゴーゴー

それは すぐそばの道をはしる車の音だったのです。目もともらない速さで通りすぎる自動車は そのたびにゴーゴーとうなり 空気をふるわせていくのです。

あまりのうるさに 耳をふさぐと

スクスク コココ ポトポト ズズズ

やさしいかすかな音。

南天の実をそだててくれた あたたかい音です。耳をすまさないときこえません。

そのほんたいに 大きなこわくなるような地ひびきの

ゴーゴーゴー

地上のものをみんなこわしてしまふような音。だれでもこの音になれてしまったら ほかの音はなんにもきこえません。もちろんあのスクスクココポトポトズズズなんて ぜんぜん耳にはいらなんでしょう。

なんにちかたつと 南天の実はゴーゴーの音しかきこえなくなってしまうていたのです。

「よし ほくはゴーゴーというリズムにのって これからどんどん大きくなるぞ。お日さまにも雨にも人間にもまけない木になってみせる」

もう スクスクココポトポトズズズのことば すっかりわすれてしまったのです。

ゴーゴーとからだをふるわせながら南天は

芽をのぼして木になろうとしましたが、それはひろひろと いまにもおれそうな木でした。どうしても大きくなれませんでした。

そばでは 小さくでしたが スクスクココポトポトズズズの音がしていたのです。でも その音にきがかないまま 南天の木はぐずぐずとくずれるように たおれました。

そして二度と立ちあがりませんでした。

それを見ていた石どうろうは ポトポトと涙をおとしたのです。

人間がやってきて

「石どうろうのせまいすきまから芽をだしてえらいもんだなあ とかんしんしていたけれど やっぱりだめだったか」

といいながら かれたほそい南天の木をひっこぬくと火の中へはおりこみました。

木は たちまちほのおにつつまれたかとおもうとゴーゴーと いきおいよく火の玉になってのぼっていきます。

ポーンポーンバチバチバチ、花火のような音がして 火の玉はひとつぶひとつぶの赤い実になり 空に大きな南天の木が立ちあがりました。

それは池のそばにうわっていた親の南天の木とおなじくらい りっぱなものでした。

みんながバチバチと手をたたいてはめていきます。とんでいる鳥も池の魚も、オンドリもアリもミミズもカエルもナメクジも、地球のマグマも、もちろん木の葉のおばさんも。

ゴーゴーゴー

風がなると 空の南天の木は雲になってな

がれ 赤い実はバラバラと空中にとびちりました。

ゆこうゆこうゴーゴーゴー

火になって音になってはてしない

空のはて地のはてどこへでも

ゆこうゆこうゴーゴーゴー

光になって音になってかぎりない

土のなか岩のなかどこへでも

ゆこうゆこうゴーゴーゴー

いのちになって音になってどこまでも

みんなのいるとどこまでも

スクスクスク

木や草や花が そだちます。

コココ コココ

みんながいつもここにいてくれるのです。

ポトポトポト

水は かわいたのどをうるをします。

ズルズルズル

地球のマグマは すべてのものをつきうご

かすのです。

ゴーゴーゴー

太陽はもえ 海王星はかがやき 南天の実はすすみます。

スクスクコココポトポト

ズルズルズルズルゴーゴーゴー

土の中で

コトッ

あたらしい芽がでたのでしょ。 (おわり)

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

木

下

隆

一

随

筆

集

31

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(17)—

木きの
下した
隆りゆう
一いち

受験勉強をしなければ、と心中では焦りながら、まあいいや、明日から始めようとい日延ばしにして、昭和二十四年は暮れた。

理数科が苦手だったというよりは、中学に入ると直ぐに、勤労奉仕で援農や水害の跡片づけ、松山基地での飛行機の掩体壕造りに駆り出されたりして、学校で授業らしい授業を受けた記憶は殆どなく、戦争が終わって気がつく、すべての学科の基礎を教わらないまま、捨て子のように放り出されていた。国語や歴史は自習すればまだ何とかだったが、基礎を固めることなく見切り発車された理数科は完全にお手上げだった。これで大学を受験しようというのだから、可成りいい度胸というか、怖いもの知らずもいいところであっ

た。受験勉強も、せめて夏休み頃から始めれば少しは格好がついたかもしれないが、この期に及んではもう手遅れだった。因数分解を解いたり、三角函数の $\sin \cdot \cos \cdot \tan$ の記号なんか見るのも億劫で、参考書類は一切目につかぬところに仕舞い込み、文学書を読むことに熱中していた。一年程前から始めた俳句が面白くなり、これが文学の世界にのめり込むのを助長したのは否めないが、とりわけこの夏休みには、国語の教科書に佐藤春夫の「望郷五月歌」が載っていたこともあって、春夫の詩に夢中になった。彼が「僕の詩について」の中で、「和漢朗詠集と今様と箏唄と藤村詩集とは僕の詩の伝統である」と述べているのを読んでからは、今様と箏唄（多分これは「梁塵秘抄」であろう）にまでは手が回らなかったが、首をひねりひねり和漢朗詠集を拾い読みし、藤村詩集もむさぼり読んだ。

日本に於ける近代詩の始祖と目されている島崎藤村が、第一詩集「若菜集」を上梓したのは明治三十年二十六歳の時で、翌三十一年には第二詩集（厳密には詩五篇、散文九篇の詩文集）「一葉舟」と第三詩集「夏草」を、そして三十四年には、詩二十五篇、散文四篇からなる第四詩文集「落梅集」を世に問うているが、これには長短併せて九十四篇の詩と散文十三篇が収められている。藤村は「落梅集」の刊行を機に詩の筆を折り、小説家に転身するが、五音・七音を基調とした絢爛たる言葉の文と甘美な調べが、佐藤春夫のみならず、後々の詩人に与えた影響は少なからぬものがあった。しかもそれが二十歳代後半のごく短い期間に集中して書かれ、それをまた三十歳という若さであっさり捨て去って顧みなかった藤村が、私には意外であり驚異でもあった。

「天才とはこういうものなのか。それにしても思い切りがよすぎるなあ。しかし、藤村のすごさはこの思い切りのよさにあるのかもしれない」

と私は思った。恐らく詩人として一気に頂点に登りつめた藤村は、そこから下るのを潔しとしなかったのであろう。詩魂の衰えを衆目に曝す愚を冒したくなかったから、小説という散文の世界に己を輻晦したのであろうが、すごいと思う一方で、天才と言われた人にしては身の処し方がいかにも打算的に思えて、むさぼり読んだ割には馴染めなかった。無知な少年は無知なりに、本能的にその詩の中に一種の胡散臭さを嗅ぎとっていたのである。初恋を詠ったものでも、「まだあげそめし前髪の／林檎のもとに見えしとき／前にさしたる花櫛の／花のある君と思ひけり」で始まる藤村の「初恋」より、春夫の「野ゆき山ゆき海辺ゆき／真ひるの丘べ花を敷き／つづら瞳の君ゆゑに／うれひは青し空よりも」（後略）の「少年の日」や、「こぼれ松葉をかきあつめ／をとめのごとき君なりき、／こぼれ松葉に火をはなち／わらべのごときわれなりき」（中略）「入り日のなかに立つけぶり／ありやなしやとただほのか／海べのこひのはかなさは／こぼれ松葉の火なりけむ」の「海辺の恋」などの方が、ずっと私の共感を呼んだ。当時私がこぼれ松葉の火のような恋ごころをつづら瞳の少女に抱いていたから、余計春夫の詩を身近なものに感じていたのかもしれないかったが……。

秋から東京支社に単身赴任していた父は、二十八日の夕方帰って来たが、その足で忘年会に行き、その夜から連夜の午前様で、大晦日の午後九時というのに、今夜もまだ帰宅し

ていなかった。

「よう飽きもせず、お酒が飲めるものよ」

膝に顎を乗せて寝ている虎徹の背中を撫でながら、母が苦笑した。

「昔は殆ど飲めない人だったのに……」

それは事実だった。父は上海にいる間に、酒の腕を上げた。いつ銃弾が降って来てもおかしくない状況下で生きてゆく緊張感と、その緊張感が生むデカダンスな気分とがないまぜになった外国暮らしでは、酒に逃避する以外に憂さ晴らしする方法はなかったのである。夫婦の間にも、親と子の間にも、いつの間にか計ることの出来ない歳月が流れていたのである。

「コテや、お父ちゃん遅いねえ」

という母の声に、冬毛を纏ってむっくり太ったように見える虎徹は、ビクリと耳を動かただけで、気持よさそうにスースー寝息をたてていた。

「いいなあ、こいつは暢気で……」

虎徹を見ているうちに、つい愚痴が出た。

「受験のことも、お父さんに相談しなければならぬのに……」

「受験?! 親父は東大受けてみろって言ってた」

「大丈夫かねえ」

「大丈夫な訳ないよ。でも受けられたら受けてみるよ、進適(進学適性検査)の成績いかんで

どうなるか分からないけど。どうせ散るなら、天下の東大落ちたという方が格好いいもの」

その時は黙っていたが、私は秘かに慶応の文学部を受けようと心に決めていた。佐藤春夫の詩「酒、歌、煙草、また女、三田の学生時代を唄へる歌」が引き金であった。

「孤蝶、秋骨、はた蕪／荷風が顔を見ることが／やがて我等をはげまして／よき教ともなりしのみ」 春夫が永井荷風を慕って慶応文学部の予科に進んだ明治四十三年頃、他に馬場孤蝶、戸川秋骨、小山内薫といった錚々たるメンバーが教鞭を執っており、自由闊達の気が横溢していたことは容易に想像できた。それだけで田舎育ちの文学少年は現実を度外視して、手もなく慶応義塾に憧れたのである。いや、それにも増して、慶応の文学部の入試には理数科の課目がないことが魅力だった。東大受験は親の目を欺く手段にすぎず、本命は慶応の文学部、それも現役からの合格が無理なことは本人が一番よく承知していたから、一年目は小手調べで、浪人して二年目を目指す——すでにそんな青写真が出来上がっていたのはだから気楽なはずなのに、内心忸怩たるものがあつたのは、学業を疎かにしたことに対する悔恨が焦りを生み、それが日に日に増殖しつつあつたからである。

「来年はどんな年になるのかしら」

母の問いに、私は言葉を濁した。確信をもって答えられるのは、私が浪人するということだけであつたから……。

「何とかなるんじゃないの。いままでとたいした違いはないと思うよ」

世情が急に好転するとはとても考えられなかったし、これ以上悪くなるとも思えなかつ

た。虎徹は母の膝を離れて、父の座蒲団で丸くなって眠っていた。夜が更けるにつれて、どこからともなく隙間風が忍び込み、寒さが増してきたのである。

犬は蒲団に丸くねまりて年送る

去年今年電灯暗くともりたり

古い句帖に、こんな句が残っている。

電力事情はいくらかよくなって、もう電圧を下げて蛍電気にするといった姑息な手段はとらなくなっていたが、六十ワットの粗悪な電球は決して明るいとはいえなかった。

私は蒲団ごと虎徹を私の方に引き寄せた。びっくりしたように頭を上げると、虎徹は寝呆け眼で辺りを見回し、状況を把握するとのろのろと起き上がり、尻を立てて伸びをした。そして、当然のような顔をして、私の胡座あぐらに乗ってきた。子犬の時のようにすっぽり収まるという訳にはいかなかったが、スキんシップを図っているつもりか、虎徹はよくそうするのであった。小柄な体型であったが、子犬の時に比べると体重は何倍にも増えていたから私の足はすぐに痺れたが、そんな甘え方が私には嬉しかった。この時点で、私が心底心を許せるものがあるとすれば、それは虎徹以外になく、つぶら瞳の少女も、いまでは遠い存在になってしまっていた。

遠くで除夜の鐘が鳴り始めた頃、ようやく父は帰ってきた。足音を聞きつけると、虎徹は鼻で障子をこじ開け、いそいそと玄関へ父を迎えに行き、酩酊した父の顔をべろべろ舐め回して歓迎するのであった。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^ぐ の 生 涯 (十)

— 大 僧 正 岩 井 智 海 伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

福知山・法鷲寺のころ

浄土宗が先鞭をつけた従軍慰問使は、やはり画期的なことであつたらしい。

というのが、それをきっかけとして、新たに「開教」という着眼が、各宗の間に強く意識されるようになっていったからである。

もちろん「布教による教線の拡張」は、何も明治にはじまつたことではない。それこそ仏教の渡来直後から、存在した。

例を浄土宗にとつても、二祖・聖光房弁長はほとんど別時念仏一本やりで九州各地に念仏を広めていったし、関東一円に法然^{ほうねん}の教えを植えたのは三祖・記主禪師良忠だった。金光房は会津から岩手、津軽にかけて根気よ

く遊化^{あそび}し、奥州に浄土教の基盤をきずいた。

いや、法然その人も、土佐の国に配流ときまったとき、

「都で念仏の行をおこしてすでに久しい。いつかは田舎におもむいて農夫をはじめさまざまな人々に念仏をすすめたいというのが念願だった。さればこのたびの流刑こそ、まことに朝恩というものである」

と語っているではないか。

幕府の戸籍業務を担当して、寺院がこの日本全土に行きわたり、むしろ飽和状態となった江戸時代だが、人影まばらな北海道にも、元禄ころすでに七ヶ寺の浄土宗寺院が開かれていたという。

開教は本来的に、その宗教が活きているということの証^{あかし}なのだ。

ただ、明治二十年代後半から三十年代にかけての開教熱の盛り上がりは、海外に目がむ

けられたところに特色があった。

浄土宗でいえば明治三十一年に「開教区規則」が制定されて、海外開教への体制がために入ってゆくのだが、じつは外征軍慰問使の派遣自体が、ある意味では海外開教への意欲をはらんでいたと言えるかもしれない。

話が戻るが、浄土宗に慰問使派遣の議が起こったのは、明治二十七年九月に山県有朋を軍司令官とする第一軍の編成がようやく終わったところで、その際、「慰問使派遣により朝鮮宗教の情勢視察を行い、後日、布教の準備をなすことは一挙兩得」とする考え方が、すでに存在したことが記録に見えているのである。

岩井智海にたいしても従軍にさいして、法要と説法による慰問のほか、朝鮮の宗教事情調査が任務の一つとして課せられていたと思われる。彼の従軍日録の十二月二十二日の項

に、第一軍の参謀長の紹介で宣諭使・権澤鎮という人物を訪ね、前記のことを尋ねたという記述があるのだ。内容自体にも興味がもてるので、少し長いが、引用することにしよう。（なお文中に散見する「予」「余」はともに「私」を表す一人称である。）

『予曰く予は今進言せし図面にある西京知恩院を総本山として、殆ど一万余寺と七百万人信徒を有する浄土宗の僧なるが、全体仏法は源と貴国の古代主室（王女）より我皇室に献貢されしものなり。今や仏教の光は人智の発達に伴ふて益々發揮し、嘗に我が国のみならず欧米文明の耶蘇教国と言はれし国さへ仏教研究者益々増加し我宗の如き更に今日まで縁故なかりし布哇にまで開教する事になり居れり。然るに貴国は遠く古代より仏教国にして、然も

我国に仏教を伝へ、目下七万余寺の殿堂を有するに至る。（中略）希くは貴公国家経営の上に、貴国仏教を拡張すること必要事件とせられたし。権曰く誠に貴説の如く貴国に仏教盛大なるは我国の光榮なり。距今四百年前李氏の世となりし當時までは、我邦も仏法は非常に盛んなりし。然るに僧侶は無学にして、品行修まらず、殊に邪淫を犯す事甚しく、殆ど国家道德を維持する人とするには到底出来ざる為めに之を排斥する事になりたるは遺憾な事なり。予曰く（中略）余等は帰国せば是非名僧を送りて、貴国の仏法を盛んならしめんと思ふ。幸に十二分の外護ありたし。権曰く私不肖乍ら熱心に保護せん。（中略）予曰く仏法弘むるは改革の際には左迄必要なきが如きも仏教の光輝を放てば、自然と罪人も減し、監獄の費用も減

じ、人臣国に対する道を知るに至らば独立の基礎も堅固となり夫婦兄弟の道を明かにし、一家和合して家業に勉励して繁栄するに至る。然らば国家改革の際に必要事件として、充分御高意を煩はしたし。権曰く敬諾^{たうたう}縦^{たう}ひ他人が何と申さんとも予は将来仏法を弘むる事に充分賛成せん。
(以下略)

(岩井智海著「道しるべ」)

権濤鎮の言葉には、いわゆる「進駐軍」側の人物にたいする外交辞礼的な表現もあったろうが、この会見の様子は、少なくとも岩井が日録に記している程度以上に、臨時賑恤部^{じんじつぶ}をつうじて宗務の担当者に報告され、それはまた「開教区規則」の制定に参照されたことであろう。

その年の十二月下旬、智海は萩原雲台、神

谷大周^(註1)、大門了康^(註2)、林彦明^(註3)とともに軍隊布教師に任命された。萩原はともに従軍した人で、読者の記憶にもまだ新しいであろう。神谷はのちの大僧正・勸学だが、当時は東京深川の靈巖寺の住職であった。年齢からみて、任命は日清戦争開戦と同時に、管長(門主)に随行して内地の陸海軍部隊を慰問してまわったことによると思われる。

大門は宇治の平等院から大本山・鎌倉光明寺の法主となった人だが、説法では超一流の布教師として今もなお話題となることも珍しくない。大門の弟子から、やはり説法の超一流に指を屈すべき神居琳応^(註4)、村上徳随^(註5)の二人が出ているのも、偶然ではない気がする。

林はのちに京都百万遍の大本山・知恩寺の法主となったが、当時は浅草大秀寺の住職で、学僧であった。そしてこの任命を受けたとき大門と林は、浄土宗の第二次慰問使として台

湾に外征の近衛師団に従軍中だった。

ついでに記しておくと、開教をめぐる諸制度制定以前のことだが、岩井は三十年七月、白石^(注6)堯海とともに朝鮮・台湾開教視察使となつて、渡鮮している。白石は「ヒゲの僧正」とよばれ、念仏の海外勇飛に熱心で、「開教区規則」を始めるする制度設立の推進役となつた人物である。二人は翌三十一年二月の帰国にさいし、大岸、在英、就賢という三人の若い朝鮮人僧をつれて帰り、浄土宗本校に入學させた。二人をコンビにして朝鮮派遣の視察使にしたのは、なかなかツボにはまつた人事だったようである。

こう書いてくると、智海も公務で東奔西走に日がなかったようだが、じつはこの期間中に、彼が住持する法鷲寺^(ほうじゅじ)が洪水で流失するという不慮の災難に襲われているのだった。

岩井は福知山の風景を叙して、

『……東は清流を隔てて史に所謂鬼が城山^(いづる)を直瞰^(ちよくん)し、北は有名なる大江山の峻嶺を烟霞^(えんか)靄^(あい)の間に眺望^(たいぼう)し、南東は青巒^(せいらん)重疊^(じようたう)として土瓶山の奇景を遠見し、西は山陰街道に接して北鎮の舞鶴、三景随一の天橋等には門前より車すべし』

(岩井智海筆「再建趣旨」^(注7))

と書いているが、実際、筆者の知る戦前の福知山も、田舎と町が共存しているような緑の多い盆地で、都会育ちにはどこか心を和ませるものがあつた。それだけを感じ、不覚にもこの町が、洪水を繰り返しているところとは、この智海大僧正の足跡を追うことになるまで、筆者はついぞ知らなかった。

というのが、福知山盆地のほぼ中央をC字

型に流れる由良川は、途中、土師川、和久川、牧川などを合わせたあと、盆地を出てやがて日本海にそそぐことになるのだが、なんと川のほうが、盆地の海拔よりも高いところを流れているのだった。そればかりではない。南北に細長い盆地のその北の出口が狭いために、ちよつと大雨が降ると水が逆流し、盆地一帯に水が溜ってしまうのである。

これが大昔から、福知山が洪水と下水に悩まされてきた原因だった。

さればこの町に入ってくる封建領主たちが、真っ先に着目しなければならないのは治水だったのだが、この仕事はちつとやそつとの工事ですむ性質のものではなかった。

福知山を町らしく建設したのは、関ヶ原の合戦以後に遠江の横須賀から移ってきた有馬豊氏といわれるが、この有馬は八万石である。元和六年（一六二〇）に有馬が久留米に移封さ

れたあと、明治までの大部分を統治するのは朽木家だが、禄高はわずか三万二千石で、とてもこの大工事をやれる技術も資力もなかった。もつとも明治以後の、政府も自治体も長らく手をつけなかったのだから、とても封建領主だけを責めるわけにはゆかないが、実際、福知山が「水害常襲地」なる奇妙な汚名を返上するようになったのは、つい最近のことである。

そんなわけだから、明治二十九年八月三十一日にこの盆地を襲った未曾有の集中豪雨には、ひとたまりもなかった。岩井は「暴風猛雨」と書いているが、おそらくそれは気象のほうでいう、台風にともなつて表れる「湿舌」による集中豪雨だったと思われる。

——死者二百余名、負傷者二百七十八名、家屋の流失百十四戸、全壊九十四戸、

半壊百一戸、何らかの破壊をこうむつたもの四百五十二戸、傾斜したものの百十二戸、浸水二階におよんだもの四百四十五戸。

という数字が、被害の大きさを何よりも物語っている。

法鷲寺は、城の北を流れる由良川に背面を接して建っていた。満々たる水量を揉むようにして流れる寺の真裏の川の堤防が決壊したのだから、これはアもスウもなかった。

『さしも堅牢なりし本堂庫裡とも全潰し七千余巻の一大藏経を始め重宝器具等悉く流失して惨害至らざるなし。然も町の区域に属する堤防大小九ヶ所一時に雷潰し、狂瀾翻然として全町に瀾漫し恰も泥海をなし人口六千余人悲鳴叫喚救を呼ぶ』

哀声は怒濤の聲に加して天地暗澹或は親を猛波に沈めて悲しむもあらば最愛の児を救はんとて共に濁流に溺るる親もあり、或は妻は夫を叫び夫は妻を喚び兄弟姉妹天に恨み地に哭して家と共に二里或は三里の遠距離に押流され（中略）、全町、財産殆ど蕩尽して僅に九死に一生を得たる者も喫ふに食なく飲むに濁水掬すべからずして却て水中に死せざりしを悔ゆるの有様なり。誠に酸鼻の極と云べし』

（前掲書簡）

という情景となった。

この惨状に、さぞかし岩井も茫然としたことであろうと思うのは大間違いで、こうなつてからの彼の動きが、じつにいきいきとして、これまた水害ほどに物凄いのである。

まず第一にやったことは、全町内を奔走し

て水死者の名を帳簿に記録し回向してまわる
ことと、岡というところにある「旧町内」九
カ寺の共同埋葬墓地をおとずれて、新霊を弔
うことであつた。

ことわつておくが、智海在住時代の福知山
はむろん「町」で、「市」になつたのは昭和
十二年のことである。その後さらに十二カ村
を編入して現在の市域となつたが、いまでも
市民は昔からの町を「旧町」と呼んでいるの
である。

こゝで十二日には、かねて声をかけておい
た兵庫県氷上郡の門中院住職を集め、岡の
共同墓地で「水難溺死者追弔大施餓鬼会」を
いとなんだ。災害後二週間足らずというタイ
ミングは、被害の規模に相応して絶妙だった
らしく、この法要には郡長をはじめ町長、警
察署長ら約八十人が参詣したと、彼自身が書
き残している。いうまでもなく今度の災害に

関連して行われた最初の法要であつて、鎮魂
に果たす宗教の本来的な使命をあらためて町
民に印象づけた教化的効果には、きわめて大
きいものがあつた。岩井が町を駆けずりまわ
つて死者百三十七人の名を確認したのは、じ
つにこのためであつた。

なお、これもついでに書いておくのだが、
他県である兵庫県氷上郡の寺院に声をかけた
のは、福知山に浄土宗の寺は法鷲寺一カ寺し
がなく、法要法類も氷上門中と組んでいたか
らにはかならない。

それはともかく、この追弔法要には各宗が
追隨した。十七日には臨済宗妙心寺派が下河
原で追弔の法要を執行し、ついで日蓮宗の寺
院は開催について相談に岩井を訪れ、二十日
には曹洞宗が追弔会をいとなんだ。智海はこ
れに招かれて随喜しているのだ。彼が各宗寺
院からも頼りにされ、一目おかれる和尚とな

ったことが、手にとるようにわかる動きである。

しかし一方、彼が宗教家としての勤めを果たしたのは、死者にたいしてばかりではなかった。

こえて二十三日には、救助小屋に避難していた二十七戸百四名の人々を集めて慰問の講話を行ない、復興に立ち上がるべき勇気を贈っているのだ。

まだ人権などというものに頭のまわらなかつた時代だから、救助小屋などといかにも「お上」がちらつく慈恵くさい不快な名前をつけているが、これは水に家を奪われた人たちを収容するために、公共体が急ごしらえに建てたバラックである。彼は慰問講演を行なうに当って、前日の二十二日にここを訪れ、収容されている人数を確認して、講演のできる場所を選定していた。

その周到さにはただ頭の下がる思いだが、この慰問講話は被災者を元気づけて非常に好評だったらしい。十月二日に鍛冶町の有志が発起して町内四十一名の溺死者追弔法要を行なったさい、数ヵ寺の住職とともに招かれて出席したが、彼だけがとくに依頼されて一席の法話を行なっていることで、それが察しられる。

非常の境遇にある人々を、法要と法話で慰問し、かつ精神を鼓舞することを、彼は従軍で体験していた。それをそのまま、悲嘆のどん底にある人々に適用したのだ。岩井智海は災害に打ちのめされた人々に、それが必要なことを熟知していたのである。

このように社会のために東奔西走する一方、その合いまをぬって、彼は流失した自坊の再建にも駆けずりまわっていた。

境内の片づけだけでも、一ヵ月を要したと

記録にあるが、さらに人夫をいれて急遽、仮
本堂を作り、諸仏を安置した。

まあこれらは常道だったとしても、小僧を
つれて、決壊した提防から奔出した流れの跡
をたどり、倒壊した本堂の柱などを泥の中か
ら探しだして、一本一本に「法鷲寺」の標記
をつけてまわるなどという作業は、なかなか
できることではなかった。この成果は仏像の
発見にも役立った。九月二十五日、彼は泥の
中から、地藏菩薩の像を見つけたしていた。

なかでも彼が努力を傾けたのは、寺宝とし
て扱っていた大藏經の調査探索だったという。
労多くして功の少ない作業だったと思われる
が、それでも見つかる、一所懸命に手入れ
をしていたそうである。

しかし岩井一代の探索では成果もしれたも
ので、この作業は代々の住職に受け継がれた。
法鷲寺前住職の嵐演激によれば、

『私の先代先々代も、大藏經探しはやっ
たそうです。とにかく泥の中に埋もれて
いる小さな冊子を探しだすのだから、大
変な仕事だった。見つけたすと紐を境内
に張り、本をそこにひっかけて乾かすわ
けです。いやいや、まだ落ち着いて数え
たことはないですけど、とても七千巻全
部は発見できていないと思いますよ。先
代に聞いたところでは、そのようにして
も五、六年ほどの間はじくじくしとった
そうです。水に強い和紙だからこそ保つ
たんでしょうけど、今でも泥の跡がくっ
ついておりますね。中の千冊くらいは見
る気もしないくらい痛んでいる。』

（嵐演激談話）

こうなると、一種の執念みたいなものを感

じざるを得ない。^(注8)

この災害にともなう一連の作業や行事の仕上げは、智海が同じ福知山の浄土真宗・成徳寺の住職と計画し、全寺院が参加して十一月一日に執行した「大追弔会」であった。岩井が執筆したと思われるその時の案内状が残っている。

『来ル十一月一日、午后二時、当町広小路ニ於テ水難死亡者ノタメ本町各宗寺院協同大追弔会執行ニ付キ全村焼香有之候旨此度御案内申上候也。但雨天ナレバ久昌寺ニテ執行ノ事』

福知山各宗寺院住職』

この大追弔会はいうまでもなく、すべて寺院側の費用負担で行なわれた。これより先、救助小屋はすでに取り払われ、避難者たちは

それぞれ縁者や知るべに、あるいは自力で住まいの手当てをして身を処していた。それとというのも復興のめどが立ってきたからであろうが、福知山の町民たちも、この大追弔会を一つのけじめとして、悪夢の水害から脱皮していったのだった。

それにしても筆者は近来、非常の時にのぞんで公私両面にわたり、これほど折り目正しく僧としての勤めを果たした人を、寡聞にして知らない。大追弔会に先立つ十月二十日、法鷲寺の総世話人、檀徒が一致団結して本堂と庫裡の再建を決議し、とりあえず本堂のみの復興資金として一千三百八円という、現在でならば一億円を軽く超すであろう浄財の募集目標を定めたというのも、いかにもそうであつたろうとうなづけるのであつた。

(つづく)

(注1) 神谷大周(二八四一～一九二〇)は名古

屋生まれ。九歳のとき名古屋・建中寺で得度、のち東京深川の靈巖寺・京都の大本山・清浄華院などを歴任し晩年には郷里熱田に大周寺を創建した。主に増上寺で修学し宗学に一見識をもつ。宗学本校教授、専門学院教授、伝道講習院長、大正大学教授などを歴任したがただの学者ではなく、布教家としても席の暖まる暇もないほど活躍したのが現代の学者と違うところ。晩年は勸学・大僧正となり八十歳で示寂。

(注2) 大門了康(一八五二—一九二八)は京都の人。大阪竜淵寺で得度、増上寺で宗戒兩脈を受け、明治五年に竜淵寺住職、以後、教学と布教に刻苦勉勵し説法の奥義をきわめ、伝道学の権威となった。のち宇治の平等院、京都小松谷の正林寺、鎌倉の光明寺の住職、法主を歴任。「往生の業事は平生に成る」という平生業成と声の念仏を主張し、気骨慷慨

な人柄で、世人これを「大門式」と称した。遊説さきの長野で七十八歳で示寂。

(注3) 林彦明(一八六八—一九四五)は滋賀県の人。甲賀郡信楽谷朝宮村の誓光寺で得度。一九歳で東京に遊学、幡随院に寄偶し宗乗から唯識を専攻した。浅草大秀寺、讀岐法然寺、埼玉源光寺、沼津乗蓮寺、京都百万遍知恩寺などの住職、法主を歴任。学問ではのち京都帝大の講師となり日本浄土教史を講じたが、宗政面でも宗学部長や宗会議員などになっている。日清戦争では第二次外征軍慰問使となり台湾に従軍した。七十八歳で示寂。

(注4) 神居琳応(一八七四—一九六九)は山形県の人。瀧里の東円寺で得度。宗学本校専門科唯識部を卒業、一時教壇に立ったが、のち布教で身を立てる決意を固め大門了康に師事した。宇治の平等

院住職から百万遍知恩寺の法主、また宗の分裂時代には浄土宗門跡にも登った。大僧正。九十五歳で示寂。

(注5) 村上徳随(一九七五—一九二九)は福井

県の人。郷里の善導寺で得度、のち大門了康に師事、京都府の迎接寺、小松谷の正林寺住職を歴任したが、宗門不振には布教をもって教化に専念するにしかずと主張し伝道に献身、特命巡教師、管長代理布教師として活躍、布教界に重きをなした。五十五歳で示寂。

(注6) 白石堯海(一八五四—一九二七)は山口

県の人。郷里の大願寺で得度。海外開教が持論で、宗の開教制度確立に尽力した。ハワイ宣教会を組織しハワイ開教に先鞭をつけ、ハワイのほか韓国の開教監督も務めた。晩年は菊や朝顔作りのほか和歌に日を送った。七十四歳で示寂。

(注7) 岩井智海筆「再建趣旨」は当時の自坊

法鷲寺の諸堂が水害で流失したのを再建のため檀家宛に発したものの。仮名の部分はカタカナ書きだが、読者の便を考慮してヒラカナとした。

(注8)

この大藏経は、法鷲寺に伝わる寺宝帖には「黄槩版藏經 六十箱」とあり、明治十八年夏に、氷上郡の天台宗神池寺から売りにだされたものを、檀徒で篤信家だった山影滝子氏から、とりあえず融資をうけて購入したものである。滝子氏は当時の福知山町長の母親で、彼女自身が四百五十冊分を寄付したのを始め、三百九十九人の檀信徒から、十冊十五冊、あるいは二十冊分と喜捨をうけて、明治二十二年五月に完済したとある。それよりわずか七年後の水害である。檀信徒たちが浄財を喜捨した心情を思えば、智海はむろん、以後の歴代住職もじっとしておれなかったであろう。

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま
とめ下さい。)
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十五巻 十月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年九月二十五日

印刷

平成元年十月一日

発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番



宮林雄彦編

● B 6 版並製
● 百四十二頁
● 定価八百円 (送料二〇〇円)

教え・しきたり・行事の解説書 (日常勤行式付)

仏事と信仰生活・浄土宗

本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え
① 仏教の教え／② 仏教の流れ／③ 浄土宗の教え／④ 念仏信仰の真髄／⑤ 寺参り墓参り／第二章 日々の信仰生活／① 仏壇／② お仏壇への礼拝のしかた／③ その他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三章 お経・念仏の実践／① 日常のおつとめ／② その他のお経／第四章 仏教行事の知識／① 年中行事／② 葬式と年忌供養／③ その他の仏教行事



発行発売 群 書

〒170 東京都豊島区巣鴨 4-7-6-403

発売 続群書類従完成会

〒170 東京都豊島区北大塚 1-14-6

☎東京 (03) 917-8411
振替口座 東京 7-168759

☎東京 (03) 915-5627
書店でも注文できます。